
花ざかりの君たちへ・改・

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花ざかりの君たちへ・改・

【Nコード】

N2893F

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

瑞樹と中津中心の漫才ストーリー、ではなく、一部漫才の佐野と瑞樹の愛の物語。ドラマであるこの話は、この作品で一風変わった構成になっております。中津の独り言も最高に笑えます。最後に瑞樹と中津がグアム旅行のチケットをもらえるのでお見逃しなく！

いけてるメンズがそろいにそろった魅惑の伝導性男子校おうさか学園、そこにアメリカ転校生がやってきた名前は芦屋瑞樹、そう彼女は男と偽って佐野を飛ばせるという目的を果たすために転校してきたのだ。

そんな中、花桜会の提案で秋のキャンプファイアーのための合宿を開くことになった。瑞樹のチームは同じ部屋の中津と佐野だった。そこで数々の困難が瑞樹を待っている。

「あつ、今日はキャンプだー」

「そうだぞ、瑞樹。キャンプって言っても男のキャンプだから過酷だぜ」

「分かってるって」

女っぽいつてことかな？

「それよりさ、もうちょつと静かに準備できねえの」

「すまん、佐野。でもさこの男のキャンプどうも花桜会と校長先生の罾みたいな感じがするんだよなあ」

「そう思って当然、これは避難訓練を兼ねた合宿なんだからな」

私が『なんで知ってるの？』と聞こうとする前に中津が言った。

「佐野は何でも知ってるっていうのは本当だったんだな」

「そんなうわさあったけ」

「いや別に」

中津はすこし気難しいというかやんちゃだ。

「このキャンプに来るゲストが超イケメンらしい、うん」

「そんなことねえって、この中津王子が負けるイケメンなわけない」
さりげなく私の手を握る中津。お姫様じゃねえって。

「わarii、瑞樹。ついな、つい」

ばれる前に卒業しないと……。

「まあ、バレバレなんだけど」
バレバレ？

「このキャンプはただ事じゃねえ、毎年あるもんじゃねえってことだ」

「へえ、佐野もいろいろ考えてんだな。それなら夏のハイジャンの合宿のことも考えてんだろ」

「そうだな。絶対行くって決めてるよ」

「よかったな、それより準備だ」

私たちは準備をした。佐野の気持ちにこたえないと、私がしつかりしないと、と思った。

私は神様じゃないんだし、できることからやろう。佐野のために。三人は謎のキャンプファイアーのための合宿に参加することになった。

「着いた着いた」

「楽しむぞー」

「キャンプ最高ー」

「レッツエンジョイ」

「どんだけ」

同じ人がバスから降りてくる、その姿に瑞樹は目を疑った。

「中津、あのバスおかしくねえ？」

「そうか？ どうしてそんなことを聞くんだ」

「同じ人がいっぱい出てくるんだよ」

中津と同室の萱嶋大樹がでてきた。彼は靈感が強く時々頼りになる。

「これは何か悪いことがおこる前触れかも」

「んなわけねえよ」中津と瑞樹が同時に言った。

「まっキャンプはキャンプだ、楽しもうぜ」

「佐野、いいこというじゃん。なっ瑞樹！」

瑞樹は萱嶋といっしょに楽しそうにしゃべっている。気づけなかった中津は一人で『ドンマイドンマイ』と言ってごまかしていた。「このキャンプは漫才もするんだってよ」佐野は中津にささやいた。「ノープロブレム！ 実に楽しいね。もちろんこの中津周一様がそれを辞退するはずがあるわけないですから」

「中津、ちよっと」

「なんだよ瑞樹」

――オレと瑞樹二人っきりか。妄想はだめだだめだ。

「佐野はなに言ってた？」

「キャンプファイヤーに漫才があるって話だけど」

瑞樹は数秒考え込んだ。

「オレと一緒にじゃだめかな」瑞樹が優しく言った。

「いやいやいや、それは漫才の話。告白じゃないよな」

中津はどうやらお年頃のようなうだ。

「なにやってんだよお」

「もちろんオツケーハッピーハッピー」

中津はキャンプになると少し取り乱す性格のようだ。

「佐野！ テント立てるの手伝おうか？」

「じゃあ後はよろしく」

「おっおい、佐野お」

瑞樹はため息をついた。この先こういうことばかりで佐野の本当の笑顔を見ることができるのだろうか。

「中津周一様参上、安心しろ瑞樹、佐野にはオレからの愛の鞭をお見舞いしておく」

「ハハ、中津はすげーな」

「もち」

テントは無事に立てれた、これからどうなってしまうのだろうかと思う佐野、中津は本当にかっこいい男なのかと思う瑞樹、瑞樹が佐野にもっとアタックして欲しいと思う中津。一体どうなるこの展

開。

佐野は一人筋トレをしていた。

「一二さーん四」

――オレがしっかりしないと、このキャンプはチームで負ける。

佐野は何を考えているのだろう。どうやらこのキャンプには秘密があるようだ。

でも、筋トレをしていても何の役に立つのだろう。

テントを張り終わった瑞樹が佐野のところに遊びに来た。

「佐野、ちよつと来てくれよ」

「なんだなんだ」

佐野は正直言っただけにされているのか、こき使われているのか分からなかった。

「ではでは、レディースアンドジェントルメン、中津ショーへようこそ」

「なんだこりゃ」

瑞樹が詳しく説明する。

「なんだって、マイクを持たせたら性格が豹変した？」

「そうなんだよ、たぶんそうなんだよ」

「ありゃ、マイクのせいじゃない。たぶん目立ちダケかもな」中津に質問する。「なかつーきのご食ったか？」

瑞樹は中津を心配そうに見ていた。不安と絶望がその瞳にはあった。

「うまかったぜ」

「やっぱりキノコだ」

ちよつとあきれてしまう佐野。

「あのキノコの効果をなくす方法は二つ。一つはキスをする事、もう一つは目立ちたくないダケをとってこることだ」

「佐野！ 後者で行こう」

「おう」

佐野と瑞樹がうまくいっていて中津は潜在的にうれしかったのか、流行の歌を歌い始めた。

「この森はどうなってんだ」

「はぁー、この森にあるのかどうか不安だよ」

「佐野も頑張って探してくれるんだな」

「なんだよそれ、軽蔑か？」

「違うって」

二人はまだ相性が良いわけではないようだ。

「前も言ったけど、佐野は佐野でいられるのが一番なんだからな」

「なにいいだすんだよ」佐野が言った、少し照れくさそうだった。

……

「見つからなかったな佐野」

「しかたない、もう晩ご飯だ。オレがキスをするよ」

物陰から中津が飛び出してきた。

「ブチュ」

「おっお前、なに瑞樹にキスしようとしてるんだよ」

——瑞樹って呼んだ。

佐野が代わりに顔を出したようだ。

「変なキノコの後遺症がなければいいよな」

「ありがとう佐野」

「そもそもこんな山でキャンプなんか無理なんだよ」

「どういことだ佐野」

中津はすでに復活していた。

「この山には悪魔が住んでいる、それは神の怒りだっていううわさがあるのさ」

この話を聞いた瑞樹と中津はげっそりとした顔でキャンプ場に戻った。

「中津が復活したことだし、頑張るぞ」

「さっそくにんじんを切ろう」

「まずは野菜炒め」

「私にご飯」

→みんなが振り向く。

「ごめんごめん、たわしがないかなって言っただけ」

中津は野菜を切り、佐野は野菜をいため、瑞樹はじゃがいもの皮をとった。

「漫才のネタ考えたぞ瑞樹」

「マジで？　すげーじゃん」

「食事のときに打ち合わせだ、よろしく」

「いやーたのしみだなあ」

このときは誰も知らなかった、このキャンプファイアーが本当に危険なものだということを。キャンプファイアーといえば、ミニゲームをしたという記憶がある人は多いでしょう。しかし今回は漫才、この競争は白熱することだろう。それでは瑞樹と中津のちょー漫才。

「うまい、まずオレと中津のコンビ名を決めようぜ」

「波月っていうのは？　中津のな、つ、瑞樹のみ、きだからさ」

「えー、佐野に聞いてみようよ」

中津はショックだったのか、だまってしまった。あちゃー。

「佐野はコンビ名何がいい？」

「うーん、『中津新漫才瑞樹』……」

「いいよそれ、最高」

「瑞樹は？」

「オレもそんな名前だったらなんでもできそう、最高だよ」

佐野にちよつと離れてもらって、密談が始まる。

「新漫才ということは新しい形態だ、だから笑わせるのではなく、楽しませるということを努力してみたい。ショートコント…トラウマ……」

実際の漫才はこの後すぐ。

キャンプファイアーは真っ赤に燃え上がっていた。

「漫才大会スタートです。はじめは難波ひとりです」
漫才が始まった。

「難波ひとりでございます。実は私今回ひとりになったのはわけがあります。まあいろいろあるんですよ」

こんな感じで漫才が始まってとうとう『中津新漫才瑞樹』がやってきた。

「中津&瑞樹でショートコント独り言」

『瑞樹「よう中津」

中津「久しぶり瑞樹」

瑞樹「久しくないけど、今日は大雨だなあ」

中津「なにいつてんだよ、晴天だよ」

瑞樹「今日は朝から真っ暗だなあ」

中津「なにボケてんの？ あっ今日はスキーできるかなあ」

瑞樹「すきありってことで」

中津瑞樹「ありがとうございました」』

大歓声の中私たちは思った、漫才は最高だと。

佐野も笑っていた。

キャンプファイヤーはやっぱり楽しい。

素朴な感じがうけた私たちのコントに教頭が『グアム旅行のチケツト』をくれた。

夏はまだ終わらない、次のお話でお会いしましょう、by 作者

(後書き)

適当に書いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2893f/>

花ざかりの君たちへ・改・

2010年10月8日15時28分発行